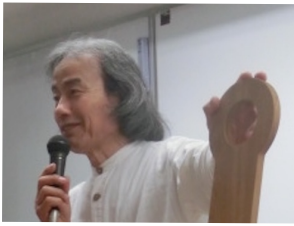


## この道55年の木工家が、デザインや木工について大いに語る



井崎正治 (いざき まさはる)

1948年、愛知県豊生まれ。1964年、木工ろくろの技術を主とする工房で修業を始め  
る。1971年、23歳で独立し愛知県蒲郡市に工房塩津村を設立。現在、家具製作から建  
築設計、木彫、木版画に至るまで幅広く活動する。各地の百貨店やギャラリーなどで  
個展やグループ展を開催。若手の育成にも力を入れている。名古屋で毎年開催される  
「木工家ウィーク」実行委員長を第1回(2008年)から第11回まで務めた。

今回の講師は、木工家の井崎正治さん。15歳で木工の仕事をして以来、この道55年になる大ベテランです。長年の経験を踏まえて、デザインや木工についての考え方、自作品への思いと解説、若手の木工関係者や建築家へ期待することなどについて、ざっくばらんに語っていただきます。井崎さんには、いろいろと示唆に富む言葉があります。今回も示唆に富んだ様々なお話を多く伺えると思います。

(司会：西川栄明)

### I. 木工家へのみち〜修業時代

#### 木工との出会い

私が木の仕事に入ったのは、1964年、東京オリンピックの開催された年です。きっかけはあまりいい話ではないのです。私は中学3年生で、高校受験を控えていました。試験会場には行ったのですが、何故かそのまま回れ右をして帰ってしまったことが発端です。家に帰りますと、親はどうしたのかと聞くわけですが、泣くわ困るわで家に居たたまれなくなって、住み込みで預かってくれるところを探して見つけたのが、木工所だったのです。1964年は本当に高度成長期の真っ只中で、世の中は東京オリンピックムード、話題もそれ一色で、華やかに見えた時代でしたが、私がお世話になったところは木地師の工房で、ロクロや旋盤等を使って丸いものを挽く仕事場でした。掘っ建て小屋みたいな工房の片隅に作った部屋に寝泊りし、ガスも水道もない。煮炊きは竈、お風呂はドラム缶。いつの時代の話かというような生活でした。ここで7年半過ごして、木の仕事を教わりました。

#### 修業の傍らで

最初に言いつけられた仕事が「飯を炊け」。修業時代は、なかなか経験できないようなことを住み込みで過ごし経験しました。昔のことですから、休みは1日と15日。当然お給金もなく、簡単に遊びにも行けない。楽しみといえば、トランジスタラジオと古本屋さんくらいでした。当時はビートルズが来日した時期で、ラジオから聞こえてくる音楽は洋楽。わかりもせんに聴いて、わかったフリをしたがった年代でしたね。それから歩いて15分ほどの近所に、面白いおっちゃんがやっている小さな古本屋がありました。古本を買えず、そのうち1週間に1回くらい古本を貸して下さったのです。狭い店の入口で長居をするので、きっと邪魔だったと思うのです。3日間の約束で、帰っては読むのが楽しみでした。借りてばかりで申し訳ないと思ってたまに買うこともあり、その中で柳宗悦さんの本と出会いました。とりたてて木の仕事をしたいと思ってこの世界に入ったわけではないので、入ってみて初めて自分のやっていることってなんだろうと首を傾げ、物を作るということに興味を持ち始めました。当時の私には難しくてどういうことかわからん。でも、柳さんの本との出会いは、ものを作ることを考える入口になりました。

#### 木の仕事で一人前になるということ

話が少し前後しますが、修業時代、いろんな仕事をたくさんさせてもらいました。当時はあまり機械がなく、手仕事でひたすら量を作る勉強の仕方。器もたくさん挽く、挽けないと一人前じゃない。職人さんには、これがこれくらいできて一人前、という物差しがあるのですが、それが測れるような仕事の仕方をしたんですね。

これ（細長い木の棒）、何だかわかりますか？鎌の柄です。季節に2～3回注文が入り、毎年それを必死に手で作っていました。朝にちょうど仕上がりが27mmの一寸角の角材を工房に入れることから始めます。カットして、旋盤で丸く削って、鎌の入る溝を引き込んで、鎌を留めるための穴を開けて、という仕事です。これを1日に何本くらい作ると思えますか？

参加者：7～8本くらい・・・？

参加者：20本くらい？

参加者：100本くらいですか？

これは、1日1000本作るんです。それができて一人前と言われたのです。初めはせいぜい100本、200本。でも普通にやっているとちゃんとできるようになるのです。体が動くようになるのですね。3年目頃から1000本できました。数ができるといいことじゃない、数を作るために体をどう動かすか、全体を見てどう動くか、ということを理解するためにやるんだと教わりました。粗挽きの木地も同じです。どの仕事にもだいたい目安がありました。そんなことをふと思い出して、今日何を話をそうかと思っていたこともありまして、実は一昨日思いついて、この鎌の柄を作ってみたのです。もう50年以上前のことですが、手が覚えているんですね。寸法測らずにちゃんと手が動いている、無駄な動きをしない、という懐かしいことを経験しました。こうしたことを当たり前でやっていたのですが、当たり前なのかな、と思うようになり、量を作ることに少し首を傾げたところで柳さんの本を読むようになったのです。そして、ものを作るって？、ということが頭の中を駆け巡って悶々としながらやっているうちに、何となく修業期間が終わって独立することになりました。

## 自分への気づき

さて、独立することにはなっただすけれども、ものを作るってなんぞや、が引っかかって、何をどうしようかと考えあぐねていました。修業時代から『室内』という雑誌も出るたびに立ち読みして、住空間や家具に興味を持つようになっていましたので、たまたま少し前に、豊橋の大蔵さんという木地師の方から、「松本（民芸生活館）でロクロと旋盤のできるやつが欲しいって言っているから、お前は家具を教えてもらう代わりにそこで教えてはどうか」という話を持ちかけられました。1972～3年頃、松本民芸生活館ができたばかりの頃だったと思います。松本に行き、池田三四郎さん（松本民芸家具創業者）が一生懸命話をしてくださり、自分もよっぽどそこでお世話になろうかなと思いましたが、立派な松本民芸家具を拝見した時に、何か違うと感じていました。よくわからないんですけども。ふと気が付いた時に、これは自分のだらしない性格もあるのですが、緊張感みたいなものを感じるのが苦手で、立派であったり技術が素晴らしいというものにどうも近づけない。これは何なのかと考えました。もっと身近な、人の生活の中で溶け込んで機能してくれるものが自分にはいいんじゃないか、ということが漠然とあったのです。ものが独立して価値や意味を持ち、構えてさあ使うぞ、というような感覚のものは、ちょっと私には無理かもしれないという気持ちががまして、帰ってからその旨をお手紙しました。仕方なく自分で食べなくてはいけなくなり、修業時代はお金をもらっていませんでしたので、とにかく稼いで何か準備しなくては、と自分で工房作って始めたということです。でも、色々なところからサンプルや図面を頂ければ作れても、自分から作っていくことがなかなかよくわからないという状況でした。手伝える仕事ならいけるかと思ひ、障害者施設などの仕事を手伝えるようになりました。こういう仕事が半分、あとが自分のロクロ・旋盤のできる受注の仕事の頂くことで、やってみようかと。それと並行して、家具に興味があったものですから、全くの独学で見よう見まねで椅子を作ったりしながら、家具もコツコツと始めたという感じです。

## 町工場のような

工房を始める時に、大きな目標としては、町工場化したいということがありました。当時は町工場がどんどん消えた時代です。地域で1軒や2軒は何か頼める町工場というものがあつたもので、私もなぜか中学1年生の夏休みの少し前に、ヒノキの足にラワン天板がついた机を、近所の建具も家具もやる木工所で作ってもらいました。親が唯一、他所に発注して作ってくれたのはそれくらいかなと思って、未だに大事に使っています。そんな町工場というものが自分の中では身近に感じていたので、緊張感なく思われる町工場にしたいなと。それから、岐阜県の早川謙之輔さんのSOMA工房を取材したテレビ番組の中での早川さんへのインタビューで小耳には挟んだ、「町工場にしたい」という言葉もきっかけの一つでもあります。1972～73年頃だったと思いますけれども、家具の仕事で、銀座で仕事をしていたらたまたま同じビルの1階で早川さんも仕事をされていました。中には店舗

が入っていたものですから、そこのオーナーが什器としていろいろと頼んでくださって、家具類をずいぶんと作らせてもらいました。もちろん早川さんは私を知る由も無かったわけですが、そこでちょっと話をしたことから、その後何回か名古屋のギャラリーでグループ展を一緒にさせてもらいました。町工場という自分の中のイメージが、早川さんを通じてとても広がり、憧れた時期でもあった気がしています。

## II. 木工家へのみち〜〜学び続ける

### かたちをつくる、デザインを学ぶ

木の仕事をずっとやる中で、作ること、造形力の不足をどうしてもなんとかしたい、という思いがありましたので、武蔵野美術大学通信教育過程に入りました。目的は、物を作ることとか、形ってどういうことなのか、デザインってなんなのか？、そういう素朴なことを学びたいということです。彫塑の授業がありまして、粘土で形、人物を作るわけですが、3日目に、教授が私ともう一人の作品を二つ、工房の真ん中に並べられて、内心褒められるのかなと期待していたら、全く逆でした。見事に潰されました。反論するわけではなく、なんか面白い先生だなと思いました。この先生だったら答えてくれるかもしれない、と思い、形のこと、デザインのこと、ものが存在するって何か、立体物の成り立ちってどういう風に考えたらいいいのか、みたいなことをしつこく聞きました。嫌がられたのですが、何度も聞くうちに少しずつ教えてくださり、自分の中で、考えるヒントをいただいたことが大きな力になった気がします。物を見ているようで見ていない、見る力もない。気づく力なり、見る力なり、感じる力なりを養って、それでもってそれを形に置き換える力がない限り、物なんか作れんぞ、という、単純な話ながらそれが理解できた。言葉の上で理解できても、それを具体的に仕事としてやるのはとても難しいです。

### 学ぶ機会作り

地元に戻ってから、いろんな若者と集まって木の仕事をしながら勉強しようじゃないか、と集まりを作ったこともあります。一人で勉強するのは限度がありますから、人を巻き込んで少し勉強してみたいと思ったわけです。技術のことを知らなくても、漆のこと、デザインのこと、いろんな形のことを、みんなで話し合える場を作りたいと思い、中部木工会を作りました。東京で「木の家具展」をやらせてもらったこともその一つです。いろんな人と一緒に展示ができることで何か少しでも吸収できたらなという思いで参加してきました。そういう中で、障害者の道具を作っている「でく工房」の竹野さんや、『無尽蔵』という雑誌を発行している栗原哲男さんと出会いました。名古屋の家具ウィークも、同じように木工する人たちが集まり、ものを作るってどういうことなのかというのを、少しでもそれぞれの問題として考えられるといいんじゃないかなという思いで参加してきています。形だけですが11年間実行委員長をしまして、12年目からまた違った目で期待している一人です。そんなふうには木の仕事を自分で始めてからかなり色々なことをして、様々な人に巡り会って、自分が作ることを色々と考えさせられるきっかけを持った気がします。

意識持って木工をしたい者同士が集まった時には、今までにない仕事の仕方を組み立てなければならない、はずなんですね。どのような組み方が可能で、それを可能にすることでどういう生業、仕組みとして出来上がっていくかというのは、みんなで考えた方がいいような気がする。お金がかかるとなかなか難しいですが、共有できる情報、やり方、技術的なことも含めて、話し合いの場ができるといいかなと思います。

それから、私が教えているように勘違いされているようですが、未だにみんなと木工塾で一緒に勉強している。70歳の今から何年できるかわからないですが、75歳まではみんなと一生懸命勉強したいと思っています。

## III. 木工塾

### なぜ作るのか

うちでは若者を集めて木工塾をやっています。ちょうど65歳になった段階で、自分の役目かなと思ひまして、木工塾をやってみよう。日々過ごす中で見つけられるもの、学んでいけることが積み重ねられないと難しいものだと思ひまして始めました。毎年4、5人ずつ入って来ます。当初は、5年以上、6年未満で若者を受け入れていましたが、現在は2年でやっています。私は木の仕事を長くしてはいますけれども、私の独りよがりな思いでずっ

ときってしまったので今更それを変えるのもどうもならんで独りよがりのまま進んで来ています。具体的に作ることの中身は色々な考え方があり、機能的なこと等は、どう作るかという発想の中で準備していけるかもしれない。ちゃんとやればやるほど便利が備わったり説明できたりします。けれども一番難しいこと、頭からこびりついて離れないことは、「なぜ作るのか」。ここを考えると、なかなか進めないと感じています。そのようなことがものについてまわる愛おしさや愛着みたいなものに繋がるのかな、というのが私の中にはどうもあります。それが何なのか。自分の木工塾の中でも、頭で考える仕事と、感覚的な仕事と、どういうバランス、要素を持ち出して構築して作り出していくかを合わせて考えていかないと、人に伝わらないのかなと勝手に思っているんですね。それを具体的に説明したり勉強したりできればいいなと思っています。

## “何か”を形に置き換える

大学時代の教授が、「存在するとはどういうことか。存在するには必ず重心があつて、少しでもアシンメトリックなものになると形がどっちなかに動いているはずだ。どういう動きをしているのかをちゃんと見ていけ」と。それが嬉しそうなのか、悲しそうなのか、辛そうなのか。わかるためには、まず動かない形をきっちり見て、描いて、確認すること。そこで気づくもの、感じるものを1つでも見つけていくこと。ですから塾生は2年間デザインを続けます。習慣的になることで、何を見ても感じ取る、気づけるようになるのではと思っています。それから、どんな形状でも、言葉や音楽、本に置き換えたりする訓練もします。言葉に置き換えると何となく結び付けられそうな気がする。気がするだけで、そんなぴったりはまるものじゃない。でもだんだんと、物がどんな風に存在するかを想像できるようになる。もちろん物を作るわけですから、素材、そして我々の場合は目的の間で作る人がいろいろと構成してひとつの形を作り上げる。さらに、作る人はどういうものを作りたいかという発想は必ず出てきて、その目的に応じた形に処理する。形を作り上げるということは、形に置き換える、ということ。置き換えた時、それがどのように見えるのか、見せるか、ものが人にどう伝わるのか、ということになるので、繰り返しやっている。技術的なことや工夫というのは自分が仕事を始めてその場に立たされた時に、欲と背中合わせでなんとかするんじゃないかと。ですが、感覚で作る部分についてはとても曖昧な物差しでしか作れない。その曖昧さを少しでもわかろうとする訓練は必要な、という気がしているんですね。

## 日々を暮らすということ

塾生は、10代もいますが、20代が圧倒的に多いです。みんな20年くらいは生活してきていると思っているんですね。とりあえず食べて寝て生きているから。でも、生活道具なりをどこまで理解しようとして生活しているかというと、そうではない。40年近く若者を受け入れていますけれども、年々、箸の持ち方、お茶碗の持ち方が、できていないですよ。道具の使い方をよくわかっていない。生活経験が未熟ということは、立派な生活をするということではなく、先人が作ってきた道具、先人が作ってきた暮らしというものがあって、その一つ一つをどこまで知れるような生活をしてきたかということ、意外にいい加減な生活をしてきている気がします。だから、課題ではまず生活道具を年間通して作って自分で使ってみることになっています。最初は独りよがりなものを作る。使ってみると思うように使えない。その時に初めて、なんで？と考える。”？”が出てくることを期待しているんですね。次に人様に向けてものを考える。使いにくいと指摘される。そこでまた、なんで？と考え気づく。万人向けのものを作るのではないですが、もう一回その道具のことを考える。原点とまでは行かないまでも、道具がなぜこの長い間支持されながらこんなふうにならされてきたのか？。それは衣食住全部同じ。わかっているようでわかっていない、気がついていないことがこんなにあると気づく。そういう単純なことにも気がつけずにものを作ろうとしていることに気がついて欲しい、ということをしています。

## IV.木工作品を通して～～初期から最近まで

### フライパンチェア

40数年前の下北沢の小さい飲食店用の椅子として作ったものです。先にテーブルを予算の都合でフローリング材で作りました。そこはフライパンの料理が多かったので、椅子はフライパンの形。店が狭かったため、邪魔にならず、掃除にラクな軽いものをとということで、24mmのフローリング材に乱尺板というのを貼り付けて作ったのがこの原型です。原型の座板はもう少し薄かったです。ホゾを作っているんですが、厚みがないので何度も緩





んで修理に行きました。その後作るたびに少しずつ厚くしたり、ホゾも緩まないようにしながら作り続けています。材木も多少選択はしますがほとんど選ばずです。座ると少し撓る感じがしますが、当初作ったのはもっと撓りました。折れはしないのですが不安に感じるようで、少し背を低くしたこともあります。不安にならない程度の揺らぎにしようと。ここ何年かはこの形と寸法で作っています。

## 畳ずりのある椅子



私の作る椅子は畳ずりのある椅子がとても多いです。日本家屋は狭く、あまり脚が出っ張っていると足をぶついたりすることが多いので。これも原型は古く、多分37年は作っていると思います。これは敢えて少し重たくしています。適度な目方って安心感を覚えるんですね。軽い椅子は軽やかで綺麗ですけども、体を預ける気持ちにはなかなかならない。それで最初、自分のサイズで作りました。腰痛があるのできちっとホールドできて、自重を預けるとい意味で、安心をつい期待してしまう、そこそこの重さがある方がいいなと思って作った椅子です。

しつこく作るんですが、そのたびにあちこち変えるので、お客さんから追加を頼まれると、たまに前と違うって叱られます。細かい箇所はほとんど作りながら変えて図面を残さないものですから、自分の体を預けるから前と同じものがいい、と言われると、前のものをわざわざ借りて作る場合もあります。今はもう少し軽くていいなと思って、また変えて作っているんです。この椅子に関しては自分の中では、安心感を感じられる重さに拘って、意固地になって作り続けています。

## スツール

これは、ギャラリーに頼まれたものです。人が集まるところに引っ張り出し、終わったら当然コンパクトに収納したいという要求があって作ったもので、スタッキングができます。お尻を乗せた時に、お尻のアタリが少しでも軽減できるように、高さを落とし、お皿状の形になっています。この座板は薄く見えますけれども、45mmの板を削っています。



## 少年時代の記憶を形に

木工とは関係ないんですが、絵を描いたりもしています。たぶん小学校3年生くらいからだったと思いますが、昭和30～40年代にいろんなページを飾った挿絵画家の武井武雄さん、初山滋さん、そのお二人が大好きで、図書館に行ったら絵本を見ていたんですね。それが、自分が絵を描ききっかけにもなっていたんです。ある年齢になってから、小さい時の記憶、遊んだこと、体験したことの肌感覚みたいなものを思い出すことがあって、何か形に置き換えてみたいなど。



これは『銀花』という雑誌の最終号の綴じ込みのページ用に頼まれて描いた原画です。内容は子供の頃の体験をそのまま書いているのではなく、少し盛って描いたり、作ったり。そんなことで、版画やこんな人形みたいなものを彫っては楽しんでます。自分の遊びで作っていたのですが、20年程前にあるギャラリーの館長さんがこの人形を見つけて、これで展示会やりませんかと言われて、これは遊びで作っているという話をしたんですが、ぜひ、とのことで出展したものです。意外と皆さん興味を持ってくれ、つい図に乗って作り続けています。

## V.今という時代の中で

### 自分にとっての心地よさ

柳さんの文章で、「美しいものを作るんじゃない、作り続ける中で美しいものが出来上がるんだ」という文章を読んだことがあります。作り続けたらできるもんかいな、と思いましたがけれども、手や体が慣れる中で、無理なことが少しずつ削がれていくことなのかな、と思っています。それから、ものに魅力を感じるかを考えた時に、作り手の思いなり、作為なりが魅力を感じるものもありますし、うるさく感じる時もあるわけですね。ものに形を置き換える中で形がおしゃべりすることを考えると、心地よくおしゃべりしてくれるやつがいいなと思うわけです。でもたまには、きちんとしたことを言ってくれる人がいないと、自分がどんどん自堕落になってしまう

ので、ものによっては背筋を伸ばして使わなくちゃいけないというものもたまにあつていいな、という気がします。日常生活の中においては、あまり俺が俺が、は無くっていいんじゃないかな、という気がするんですね。

## 自分で作る生活



前に並べているのは、自分で作った焼物です。焼物が好きで買おうと思ったのですが、普通のもので欲しいかったのに、なかったんですね。それで仕方なく自分で作ったラーメン丼や、湯のみ、茶碗。今着ているこのシャツも自分で作って長年着ています。我が家も、もちろん大工さんの手も入っていますが、自分で改装しています。

工業製品は、均一で機能がとても優れていると思います。よく考えられた、誰にでも使えるようにという発想です。でも、否定という意味ではなく、誰かが作ったとか何か人間的なものが伝わる方が、ものを元気に使えそうな気がするんです。だから私が人に作ってもらうこともあります。手に入れるのが簡単でも、そればかりだと自分の手でものを作り出すことからどんどん遠くなってしまう。まず自分で作れるものは作る。作れないものは、人に委ねるか、工業製品の便利なものを求めるのかは、個々の問題の気がします。ですから、工業製品がデザインされる中でそういうことを考えていらっしゃる方が作っていると思っているし、作って欲しいと思いますね。愛着というのは、ものに親しみを感じて接触できる、尚且つ継続できることだと思います。そうすると、継続する何らかの関わりが持てないとなかなか継続できませんよね。便利で長く使えるものはあると思います。でも便利じゃないけれども長く使ってきた、というものもあるのです。私の場合、むしろ後者の方が愛着が持てるような気がします。私の部屋の窓の鍵は閉める時にはいちいち回して閉める。天気によっては食い違うからうまく閉まらない。でもあの鍵を意識して閉めるのが大好きなんです。これは愛着といえれば愛着。自分が気持ちよく感じられる、感覚的に身近に感じる感触みたいなものが自分に合った時に、長く使えるような気がします。強いて愛着と思っていませんけれども、気持ちよく使いたい、継続して使いたい。愛着と似ているけれども、愛おしさもどこかにあるんですね。自分が作ったからとか、いろんなことを含めてですけども。

## 表現者ではなく

物を作る人の中にはいろんな考え方があって、立派な熟達した技術でものを作られる方がこんなにもいるのかと感じていますが、それを自分が作れるか、作りたいかという、距離を感じるものがあります。私は町工場で近所の人に頼まれて、あいよ、と作る仕事がいいなと。使ってもらって、便利とかではなく愛着や愛おしさを持って暮らしてもらえれば、錯覚かもしれないけれど、ちょっとは人間的な仕事ができるんじゃないかと思いついて、気がついたら55年、みたいなものです。自分が表現者になろうと思って作ったわけではないんですね。物を作ること、ものの在り方、具体的な形って何だろう、と考えた時に、お手本は「自然」にしかないような気がするんです。出発は不自然ではないということかなと思いついて。そこから才能がある人は、自分が、私の、という仕事をたぶんしていくだろうと。私は自分の身の丈のところでやれることをやっている、そういう感じです。

## 木工の道に進もうと考えている若者に向けて

繰り返しになりますが、年々便利なものはいっぱいできてくる一方で、自分の手でものを作り出す力というのは、自分の生活することを含めて基本的なことかなという気がします。木工の仕事をする人が増えるのはなかなか難しいかもしれないけれども、できる形で「作ることへの参加」を継続していただける、ものづくりの人になっていただけるといいなというのが願いでもあります。50数年やっていますけれども、やめようと思ったことはないし、本当に楽しい仕事この上ないと思っております。



※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

今回は、井崎さんに多くの作品をお持ちいただき、お話だけでなく、手に取ったり座ったり、と楽しい時間を共有させていただきました。

誠にありがとうございました。

お越しいただいた皆様も、誠にありがとうございました。